

森宜人『ドイツ近代都市社会経済史』日本経済評論
社二〇〇九年

加来, 祥男
福岡工業大学

<https://doi.org/10.15017/16982>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 25, pp.113-118, 2010-03-23. 九州大学附属図書館
付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：

【書評】 森 宜人

『ドイツ近代都市社会経済史』 日本経済評論社 二〇〇九年

加 来 祥 男

「ドイツ近代都市社会経済史」という題名からはドイツの近代都市についての通史や概説が予想されるかもしれないけれども、以下の目次から窺われるように、本書はフランクフルトの電力業と電力政策に焦点を絞った実証研究の成果である。

序 章 本書の課題と研究史

第一章 近代フランクフルト社会と給付行政

第二章 フランクフルト国際電気技術博覧会

第三章 都市電化の初期局面

第四章 広域発電企業との対抗関係

第五章 奢侈的エネルギーから必需的エネルギーへ

終 章 都市化と電力・給付行政

早速内容を概観しよう。

序章は広い文脈のなかで本書の課題を設定している。ドイツにおける

都市への人口集中は一九世紀前半に始まり、第二帝政期に本格的局面を迎え、一九一〇年に都市人口は総人口の過半数を占めた。人口集中に伴って、近代都市特有の「都市的生活様式」ができあがるとともに、そこに生起する様々な社会問題を解消するためにインフラが整備され、社会政策が展開されて、都市行政は「治安・財産行政」から「自治体給付行政」へと転回した。著者は、こうした見取り図のなかで、自治体給付行政の柱をなす公共事業のなかでもとくに電力を研究対象として設定した。電力の実用化は電灯や市街電車から始まり、とくに市街電車は一九〇〇年までに五二都市で運行され「大都市」の象徴としても機能した。二〇世紀初頭にはドイツのほとんどの都市で電力が供給されており、その多くは都市発電所によるものであった。

こうした領域に関する従来の研究では、第二帝政期を「都市化」の本格的局面として捉える点でドイツの代表的な研究者に認識の一致がみられる一方、行財政の中央集権化が進んだヴァイマル期について研究が手薄である。このように整理した著者は、とくに都市の電化をみる場合に

は、電力が「必需的エネルギー」として広範な社会層に普及したヴァイマル期にまで射程を伸ばす必要があるとして、本書の課題を、一八八〇〜一九三〇年代初頭のフランクフルト・アム・マインの電力業政策を分析し、それをとおして電化が都市社会に及ぼしたダイナミズムを明らかにすることに設定している。

第一章では近代都市フランクフルトの発展が概観される。神聖ローマ帝国時代から帝国都市として長い伝統をもち、政治的に重要な位置にあったフランクフルトは、一八六六年普墺戦争後にプロイセン王国に併合され、ヘッセン・ナッサウ州の一都市となった。併合直後に八万人弱であった人口は一八一四年には四五万人ちかくにまで増大した。当時のドイツでも際立つこの人口急増は、隣接地域からの人口流入と周辺自治体の合併によるものであった。周辺都市の合併は、住宅問題や衛生問題などの一解決手段であると同時に、「自治体合併による工業化」の意味をももった。それをとおしてフランクフルトは「工業都市としての地歩を確立させていった」(四三ページ)のである。

プロイセン併合後のフランクフルトにおける市政の運営主体は、行政実務を担当する市参事会、立法や行政監督を主任務とする市議会であったが、市政参加の前提となる市民権保有者数は限られていた。市議会では自由主義三政党の勢力が強かったが、議員間で社会的バックボーンが共有され、各種協会の超党派的政治活動の場として機能したことから、一九〇〇年にいたるまで明確な党派的な対立は生じなかった。自治体の最高責任者として給付行政の発展に大きな役割を果たしたのは上級市長であった。著者は、歴代上級市長の政策とその成果をインフラ整備、財政問題、住宅建設や労働者保護といった社会政策、工業化による都市振

興、都市開発に整理して概観している。

第二章は、フランクフルトにおける電力導入と、そのシステム選択にあたって重要な意味をもった国際電気技術博覧会を取り上げている。ドイツで都市への電力供給が本格化したのは一八九〇年代であったが、ここでは直流システムと交流システムとの支持者の間で論争がみられた。

著者は、直流システムの下で電力業の業績が伸び悩み、二〇世紀初頭に交流に切り替えられたダルムシュタットと、当初から三相交流システムを採用し、工業、照明、市街鉄道に電力をバランスよく供給したマンハイムの事例によって両システムを対比している。また、とくに電動機部門における需要の不在が交流システムの普及の隘路となっていたこと、直流システムに先行投資した企業はその優位を示す活動を行ったことも指摘されている。

フランクフルトでは一八八六年に市参事会が電力業導入の検討を始め、そのために設置された委員会や参事会での検討を経て、八九年一月には市議会でも市による発電所の建設・経営が議決された。しかし、交流システム利用、ガンツ社への発電所建設・経営の委託という参事会の提議について市議会は決断を下さず、問題を先送りした。著者によれば、それは、開催が決まっていたフランクフルト国際電気技術博覧会の成果に俟つという考えが働いたからであった。その博覧会は、市からの助成金と敷地の無償提供を受けて九一年五月一六日〜一〇月一九日に開催され、延べ一七万人の入場者を集めた。この博覧会では、三相交流システムによる長距離高圧送電実験が交流システムの優位を印象づけた。また、発電機、変圧器、送配電施設、電動機関連の充実した展示は、電動機が「中間層救済政策」としても有効という考えに基づいていた。博覧会で

優位を示したとはいえ、交流システムはなお実験的な色彩の強い最新技術であり、博覧会閉幕後もフランクフルトでの議論は紛糾し、最終的には九三年に、単相交流システムの採用、スイスの新興企業ブラウン・ボヴェリイ社への中央発電所建設の委託が市議会で承認された。九五年一月に運転を開始した発電所は、同社に賃貸され、それが経営を担うこととされた。著者はこのシステムを、「都市計画と有機的に連関し、かつ長期的な発展の余地を有する戦略的な電力業が実現された」（九三ページ）と評価している。

第三章は、前章につづいてフランクフルトにおける電化の初期局面を対象とする。当初は発電所建設、送・配電網敷設を行った二つの企業に発電所の経営が委託されたが、経営の安定が見込まれると一八九九年四月に発電所は市の直接経営に移され、一九〇〇年には近郊の発電所も買収され市営第二発電所として電力を供給することとなった。公営化後は需要喚起による収入増が電力業政策の主眼となったが、照明用電力の従量料金規定は大口需要家に有利であり、小規模発電所やガス灯との競争もあって、電灯の家庭普及率は一〇%にも満たなかった（贅沢な灯り）。他方、手工業者の救済への期待から動力用電力には低い基本料金設定されたが、その普及には偏りがあった。フランクフルトの電力供給で最も重視されたのは市街鉄道の電化であり、一八九八年には私営馬車鉄道が公営化・電化された。市街電車は第一次大戦前夜までに住民の一般的な交通手段として定着した。

市営発電所が周辺自治体へ供給圏を拡大するなかでは、収益主義的な経営路線によって「継子扱い」されるころもあった。市街鉄道についても、郊外路線の鉄道会社公営化とともに、郊外鉄道路線網の建設が構

想されたが、後者ではフランクフルト北西のバート・ホンブルクに至る路線が一九一〇年に完工したにとどまった。フランクフルトの電力消費量は大都市のなかでも相対的に多く、その電力政策も積極的であった。経営状況は良好であり、電力業収入は、公債の発行とらんで財政上の収益源として重要であった。

第四章はフランクフルトと広域発電企業との対抗関係を取り上げている。ヴァイマル期は広域発電網の急速な発展とそれに伴うドイツ電力業の集中進展の時期として特徴づけられるけれども、都市への電力供給の主体が完全に広域発電企業にシフトしたわけではなかった。著者によれば、一九二八年時点で、人口一〇万以上の三九都市のうち二三都市では市営発電所が電力の主たる供給源であった。その要因としては、電力業の財源としての重要性和長距離送電技術の未成熟をあげられている。

私企業として設立され、自治体による株式取得をとおして公私混合企業へと転換したライン・ヴェストファーレン電力株式会社 RWE は、第一次大戦期からヴァイマル期にかけて供給圏を拡大した。それによって、ケルン、ボン、デュッセルドルフなどの都市では、発電力供給は RWE によって一元的になされ、小口の需要家に対する配電が都市発電所によって担われるという「二重供給構造」が形成された。RWE はさらに、北部や南部の発電を組み合わせ大規模な広域発電システムをつくりあげた。他方、第二帝政期には限定的であったプロイセン政府の電力業政策は、私企業、とくに RWE による電力市場の独占に対する懸念から広域発電システムの形成を企図し、第一次大戦後には発電所の設立、既存発電所の株式取得によって中部ドイツ全域をその管理下に入れた。それは RWE との激しい競争関係を生み出したが（「電力戦争」、一九二七年

には両者の境界線を設定した「境界決定協定」が成立した。プロイセン政府は同年にプロイセン発電所オーバーヴェーザー株式会社PKOに他の発電所を「融合」させたプロイセンエレクトラを設立したが、同社はRWE以外の広域発電企業とも境界決定協定を締結し、それによって二〇世紀後半まで存続することになる広域発電の供給圏構造が形成された。

こうしたなか、フランクフルト市では電力需要急増への対応が必要となった。暫定的にはPKOからの電力購入によって対処しながら、RWEからの電力供給提案を拒絶し、市発電所の拡張を図る計画が立てられた。しかし、そのための外債起債について上級政府が申請額の半分以下しか認めなかったために、発電所の拡張規模は大幅に縮小されざるを得ず、外部電力の可能性が模索されることとなった。そこで、ヘッセン政府、ライヒ政府との共同プロジェクトが焦点となった。ヘッセン政府とは共同でヘッセン・フランクフルト褐炭乾留発電所株式会社Etragが設立され、それが火力発電所を建設したけれども、電力供給の開始は遅れ、プロジェクトの続行そのものは非が問われた。ライヒとの共同プロジェクトである水力発電所建設については、その建設費の捻出が困難ななか、一五〇〇万ライヒスマルクがプロイセンエレクトラから融資されることとなった。融資の付帯事項として、フランクフルトとプロイセンエレクトラとの間では、株式購入、同社からの電力購入についても協定された（一九二九年一〇月）。三〇年度以降、市営発電所での発電量は急減し、それに代わってプロイセンエレクトラからの購入量が急増したが、著者はこれを、「両者の対立関係よりもむしろ再編された関係の延長線上に生じた」ものとし、「この市内発電の優位は第二次大戦後まで維持されることとなる」（一八三ページ）、と評価している。

第五章では、著者の中心的な主張の一つである、電力の奢侈的エネルギーから必需的エネルギーへの変容が論じられる。一九一三年から三〇年までにフランクフルトの電力消費量が約二・七倍の増加を示すなかで、市街鉄道と私的照明の地位は逆転し、後者が首位の座を占めた。著者は「ヴァイマル期における市内消費電力量の著しい増大は、何よりも私的照明セクターにおける電力消費の急増によって推進された」（一九七ページ）と述べ、それを奢侈的エネルギーから必需的エネルギーへの変容と評価している。これには、電力料金の価格が低い水準に据え置かれ、部屋数の少ない小住宅を優遇した「フランクフルト式住宅用電力料金」体系が導入されたこともかわっていた。また、二七年一二月にフランクフルトで開催された光の祭典も、電灯普及の宣伝機能や広告用照明の啓蒙、照射技術一般の普及に寄与した。

フランクフルト市における「富裕な中間層」向けの前衛的な住宅地であったレーマーシュタット団地では、この時期としては例外的に完全電化の試みがなされ、給湯器や電気コンロの導入は住民の生活慣習を大きく変えたけれども、住宅の完全電化そのものは電力料金の高さから歓迎されなかった。電気冷蔵庫や洗濯機などの大型家電製品の普及は第二次世界大戦後であった。

終章は本論で展開された内容の要点をまとめ、近代ドイツ近代都市研究における本書の位置づけとして、第二帝政期とヴァイマル期との連続性、ヴァイマル期には「大衆消費社会」の萌芽がみられたことが指摘されている。

本書の特徴は、都市化を背景の問題関心としながら、フランクフルト

大都市史研究所蔵の資料をふんだんに利用した実証研究の成果という点にある。序章で指摘された「都市社会化」や、それとかわる、「治安・財産行政」から「給付行政」への転回は、今後の都市化研究にとっても貴重な手がかりであり、第一章で概説されたフランクフルトの市長論も興味ふかい。第二章以下ではフランクフルトにおける電力業や電力政策の展開のリアルな像が提示され、挿入された多くの図は叙述に彩りを添えるとともに、内容理解の助けとなっている。総じて、ドイツの都市化や電力業に関する先駆的な研究として、本書は大きな寄与をなしているといえよう。

評者は、そうした本書の意義を確信すると同時に、いくつかの論点については、論理の運びがやや性急ではないかという疑問も抱いた。以下ではその主なものを書きつけることとする。

直流から交流システムへの転換については、フランクフルト国際電気技術博覧会における実験が「直流システムに対する交流システムの圧倒的優位を示し、「電力輸送に一新紀元を劃する」意義をもつとして強調されている（八〇、八三ページ）。しかし、一九世紀末には電動機部門における需要の不在が交流システムの普及にとって隘路となっていたという指摘（六九ページ）や、三相交流システムへの切り替えがフランクフルトでは一九二六年に始まり、世界恐慌期に中断されたという事実（二七三ページ）などを考慮すると、三相交流システムの本格的な実用化には若干の時間が必要であったという留保点（八四ページ）については、より立ち入った考察や説明が必要であるように思われた。

広域発電網の発展とそれに伴う電力業の集中の時期として特徴づけられるヴァイマル期について著者は、都市自治体が電力業の自律性確保に

努めた点を重視している。しかし、第四章の叙述を読むと、フランクフルトにおける市営発電所の拡張計画や共同プロジェクト、RWEの電力市場独占に対する市の反発は理解できても、契約締結以降のプロイセンエレクトラによる電力供給の増加とさきに引用したような結論をつなぐ道筋については判然としないところが残った。この点ともかわって、RWEとその傘下にあつた都市とで作り上げられたという「二重供給構造」の仕組みについてはより詳しい説明が欲しかった。また、プロイセン政府とRWEが構築した広域発電網や、両者の相互関係については、これら以外の広域発電システムを含む全体的な見通しが与えられていれば、その理解がより容易になつたであろうとも思った。

本書のいま一つの特徴は、電力が必需的なエネルギーとして定着するまでを「電化」として捉える点にあり、第二帝政期とヴァイマル期の連続性もそこから主張されている。一九二〇年代のフランクフルトにおける消費電力量著増のなかでの私的照明エネルギーの占める割合の上昇がその根拠とされていることは、既にみたとおりである。しかし、著者があげた表五―一によれば、動力もまた同じく消費量を増大させ、その割合は一九二〇年代初頭には五〇%を超え、三〇年度にも三七%であつた。第二章では「中間層救済政策」としての電動機という考えが紹介され、第三章にも、フランクフルトにおける動力用の電力料金は照明のそれよりも低く設定されていたという指摘もあるだけに、伸び率が小さいという理由から動力に関する考察が省かれたことが惜しまれる。また、電力消費のセクター間比率については、表三―七が一九一二年度の大都市における消費電力量のセクター別構成が示しているのだから、この分析から各都市の電力消費の特徴を析出できれば、都市類型を考えるうえで

面白い結果が得られたかもしれない、という感想ももった。

以上のほかにも、フランクフルトの都市としての性格づけ、フランクフルトにおける「給付行政」の全体像や、そこにおける公共事業としての電力業の意味などについても、著者のより詳しい説明や構想をきいてみたいと思った。もっとも、これらは、本書が設定した枠を超え、今後の課題といふべきものかもしれない。本書を跳躍台として、著者の研究が一層発展することを期待したい。